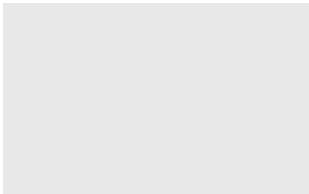


書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



第二次世界大戦への外交史 2
ナチスの勃興から開戦まで 1933-1939

芦田均

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

本書について

芦田均には「一〇一五年に岩波文庫に入った『第二次世界大戦外交史』を含め、「芦田外交史五巻」あるいは「最近世界外交史全五冊」などと称される一連の著書がある。そのそれぞれの初版は刊行順に次のとおりである。

- 1 『最近世界外交史 前篇 ビスマルクより世界大戦まで』一九三四年（明治図書刊行）※芦田均訳編（テランデンブルヒ原著）
- 2 『最近世界外交史 中篇 世界大戦より戦後の欧洲まで』一九三四年（明治図書刊行）
- 3 『最近世界外交史 後篇 米国参戦より聯盟脱退まで』一九三四年（明治図書刊行）
- 4 『第二次世界大戦前史』一九四二年（中央公論社刊行）
- 5 『第一次世界大戦外交史』一九五九年（時事通信社刊行）

5の『第二次世界大戦外交史』は芦田均歿後ほどなく刊行され、それに統いて時事通信社から右記1～4の既刊著作も新たに校訂のうえ改版復刻された。先ず一九六〇年に『第二次世界大戦前史』が改版復刻され、その後一九六三年から一九六五年にかけて『最近世界外交史』三冊が改版復刻された。

本書『第二次世界大戦への外交史2 ナチスの勃興から開戦まで 1933-1939』は、右記4の時事通信社改版復刻『第二次世界大戦前史』の改題改版復刻である。本書初版刊行時は言論の自由が強く制約を受けつつあつた時期であるため、芦田均は、改版の場合、かねて不備不満に思つてゐる箇所を増補訂正するつもりであつたという。そうした事情で、時事通信社改版復刻においては第五章「独伊枢軸の結成」中の日独防共協定の成立に関する項が書き改められ、第六章「日支間の全面戦争」が増補された。

この書肆心水版においては左記の表記調整をおこなった。

一、ごく一部の送り仮名を現代的に調整した。（例 潤おす→潤す）

一、読み仮名ルビを補つた。

一、本書刊行所による注記は「」で括つた。

一、底本では漢字は新字体が使用されており、まれに旧字体が混在しているが、これは新字体に変更した。

一、底本では仮名遣いは新仮名遣いが使用されており、まれに旧仮名遣いが混在しているが、これは新仮名遣いに変更した。

一、底本の片仮名表記を三つ変更した。リップントロップ→リップントロップ、リープクネヒト→リープクネヒト、ベルヒテスガーテン→ベルヒテスガーデン。

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡序

例 $\frac{1}{7}$

$\frac{1}{9}$

第一章 ナチス・ドイツの勃興 20

- 一 ワイマール派の凋落 20
二 ナチスの革命 26
三 ナチス外交の展開

- 1 「平和的意図」の表明 33
2 ポーランドとの妥協 37
3 ザール地方の復帰 40

第二章

ドイツの再軍備と歐洲 40

- 一 序説 43
二 東欧ロカルノ 45
三 ロンドン宣言 48
四 ベルリン会談よりストレーヴァー
五 仏ソ相互援助条約 52
六 英独海軍協定 56
七 ロカルノ条約の廢棄 59

49

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第三章

エチオピア征服

73

- | | |
|-------------------|----|
| 一 エチオピア事件の意義 | 93 |
| 二 ラヴァルとボーレード・ウイーン | 73 |
| 三 國際連盟の混迷と英仏 | 82 |
| 四 伊エ紛争と歐洲の勢力均衡 | 92 |

第四章

スペイン革命と歐洲

96

一 革命の原因

96

- | | |
|----------|-----|
| 1 農業土地問題 | 97 |
| 2 教会の專横 | 98 |
| 3 民族問題 | 99 |
| 4 軍閥 | 100 |
- 二 共和革命直前の政情
- 三 フランコ將軍の革命
- 4 1 革命と列強の立場
- 3 2 思想的対立
- 2 1 スペインの地理的条件
- 1 1 フランスとスペイン
- 0 1 イギリスの利害とその政策

91 77

13

第五章	外交ゲリラ戦	イタリアの利害関係
五	8	6
	不干涉委員会の紛糾	ドイツの立場
2	1	7
	ニオン会議以後	ソ連の態度
		8
		ボルトガルは革命派を支持す
第六章	独伊枢軸の結成	イタリーの外交
	1	1
		イタリーと英仏
	2	2
		日独防共協定
四	3	3
		独伊の情意投合
	4	4
		1
	5	5
		0
日支間の全面戦争	1	1
一	5	5
二	6	6
三	7	7
四	8	8
五	9	9
日支戦争初期の英米の態度	1	1
	6	6
	7	7
	0	0

第七章

オーストリアの滅亡

176

一 オーストリアの特異性

176

二 世界戦後のオーストリア

181

三 欧洲の勢力均衡とオーストリア

181

四 ザイペルよりドルフスへ

191

五 ドルフスの独裁制

198

六 ナチスの躍進

207

七 國際情勢の急迫

210

八 オーストリアの臨終

214

第八章

チエツコスロ伐キアの崩壊

221

一 チエツコ建国の癌

221

二 ズデーテン問題と列強

223

三 危機の前ぶれ

227

四 五月二十一日の危機

231

五 ランシマンの奔走

236

六 ベルヒテスガーデンと英仏案

241

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsuu.com

第九章

嵐の前宵 273

一 枢軸側の積極外交 273

1 ボヘミア壊滅以後 273

2 メーメル返還 277

3 平和戦線結成の企て 278

4 仏伊関係の緊迫 280

5 アルバニア併合 281

台風の中心ダンチッヒ 294

一 パリ会議よりドイツの要求提示まで 290

二 ダンチッヒに危機迫る 300

第十章

一 ドイツを中心とする渦巻き 283

二 最後の和平努力 289

三 最後の和平努力 289

七 ゴーデスベルグの最後通牒 246

八 劇的不安 249

九 ミュンヘン協定 253

一〇 ポヘミアへの進軍 257

一一 夕の祈りの鐘 262

一二 チェコスロvakiaの埋葬 266

第十一章 独ソ協定の成立前後 309

- 一 独ソ関係の変転 309
- 二 ソ連の肚の中 311
- 三 英仏の遲疑逡巡 316
- 四 独ソ協定の地下潜行 316
- 五 独ソ協定の反響 323

第十二章 最後の十日間 330

- 八月二十二日（火曜）330
- 八月二十三日（水曜）330
- 八月二十四日（木曜）333
- 八月二十五日（金曜）333
- 八月二十六日（土曜）336
- 八月二十七日（日曜）342
- 八月二十八日（月曜）344
- 八月二十九日（火曜）347
- 八月三十日（水曜）349

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第十三章

アメリカと歐洲危局

一 アメリカの孤立的性格

1 パイオニア精神 356
2 いわゆる西半球への脅威 360

二 中立法の制定以後

三 ミュンヘンとアメリカ

1 大衆と指導階級 366
2 ボヘミア進軍以降 381

四 五 六 欧洲開戦と白堊館

1 390
2 396
3 403

外交事項索引

4

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

第二次世界大戦への外交史2

ナチスの勃興から開戦まで 1933-1939

序

歴史とは前例によつて学ぶ哲学であると、ギリシャの先哲がいつた。今の世に史実を説く者のいだくはかなき望みは、われらが歴史の経験を顧みて、人類進歩の方向を誤りなく凝視せんことである。わずかに過去三十年間に流した数百万、あるいは千万人をこえる人類の血潮を考えただけでも、この犠牲をいかにして空しくせざらんかに想到することは、われらに課せられた重大な責任である。

現代において、人類のもつすべての感情と理念と狂暴性とが竜巻のごとく渦巻いている舞台はヨーロッパであり、その変転の敏速なことにおいても、歐洲は特異の性格をもつ。私はさきに『最近世界外交史』三巻を刊行して、十九世紀の末葉より、ナチスの出現にいたるまでの国際政治を叙述したが、それ以後の世界の変化はおそらくこれに比べて劣らない波瀾重畳の跡を示していると思う。

まことに、アドルフ・ヒトラーの出現は二十世紀の驚異であり、ナポレオン・ボナパルトの跳躍にまさる史上の大事故であつて、これがために全ヨーロッパ、全世界の相貌は全く一変してしまつた。ボナパルトの代表した思想がフランス革命精神であつたごとく、ヒトラーは全体主義の権化として、思想的に世界を風靡しつつある。その影響がいつまで現代文明の風潮を左右するかは予見しえないところであるが、これを二十年前の世相と対照して、その変転の甚しいことをおどろき、人類の数奇な運命を痛感せざるをえない。

第一次大戦の当時、露都にあつてレーニン革命の鬨の声を聞き、パリに長距離砲の炸裂を耳にし、ヴェルサイユ宮殿に和平調印の情景を目撃した著者は、眼前に展開されつつある歐洲大戦乱の光景を想望して、まことに感慨の抑えがたきものがある。

二十年の昔、ヴェルサイユの鏡の間に和平条約が結ばれた時、これより新しき世界の秩序が始まるかのごとく狂喜した群衆の夢と、その刹那、すでにラインの右岸において、条約の桎梏に痛憤しつつ、復讐の日を誓ったゲルマン民族の興奮と、そしてその結晶として惹起された第二次大戦の経緯とは、まさしくわれらの感激をそそる史料である。著者は多分の感激をもってこの一篇を起稿したのであるが、俗事倥偬の裡に筆を執つたために、歴史としても、物語としても、遗漏粗笨の点が少なくないことをあらかじめ読者の寛恕を乞わなければならぬ。著者の志すところはナチスの勃興より今回の大戦にいたる泰西の史実を渉猟して、身に受けた感激の一部を読者に頌ちたいとの微意にほかならないのである。

昭和十六年十月

東京にて 芦田 均

SAMPLE Shoshi-Shinsu

凡例

- この書冊は世のいわゆる専門家に非ざる人に読まれることを目標としたために、条約文や政府の公文書等はその骨子を記述するにとどめ、また、なかには解説的な記述を挿入した点も少なくない。諸所に物語に類する節のあるのは、わが国の読書階級に国際政治に対する関心を深からしめたいとの希望から出たことである。
- 記述の公平を期するため、関係国の発表した記録、声明文等ができるだけ多く参照することにつとめたが、入手に困難な事情もあって完璧を期しえなかつたことを遺憾とする。
- 参考書籍は重要なものを掲げるにとどめて、多くは割愛した。索引の完璧を期することは読者に親切な所以であるが、すべて著者一人の手で切り盛りした結果、期待にそわない点も多いことと思う。「本書には外交事項の索引を作成して付録した。」
- 地名、人名等の固有名詞はわが国において通常使用されている例によつて、必ずしもその国の発音に従つて統一されていないのは、それがためである。
- 本書に取り扱つたのは、ヒトラー執権の一九三三年から、第二次大戦の勃発した一九三九年九月上旬までの出来事である。かりに第二次大戦の原因を遠因と近因とに分かちうるとするならば、この期間はもっぱら後者に属する事件の続発した時代である。
- 第二次大戦の原因を尋ねて第一次大戦以前に遡らんとする読者は拙著『最近世界外交史』を参照されたい。大戦開始以後の国際政治については近き将来に稿を改めて刊行する念願を抱いている。

第一章 ナチス・ドイツの勃興

一 ワイマール派の凋落

一九三三年以後のドイツはヒトラーのドイツである。しかし一世を風靡した人物の出現には、必ずその時代精神とこれを背景とする世相とが存在することはいうまでもない。したがつてナチスの抬頭を説く前に、まず一九三二年の末にいたる十余年間のドイツ共和国がいかなる状態で存立したかを一瞥しなければならぬ。

敗戦後のドイツに出現した第一共和制は、普仏戦後にフランスに建てられた第三共和国と多くの点において似ていることは奇縁である。双方ともに敗戦の後をうけて、国土は削られ、賠金は強要せられ、士気の銷沈によって国内人心の和合を欠く時代に、政治の難局を引き受けた基礎の脆弱な政府が出現した。国民大衆がこれに追随したのは、一時の間に合わせ政府と考えた程度であつて、これが永続を期待するものはきわめて少数であつた。

一九一八年秋にドイツの敗戦が決定的となるまで、ドイツ国民は忠実にホーヘンツォルレン王朝に服従してきた。そのころライヒスタッハ（帝国議会）は表面上民主的政治機関であつたけれども、君主の大権を制限するごとき伝統的権限を持つてゐるわけではなく、イギリスの議会と趣きを異にして、議会は外交、国防を監視するごとき憲法上の前例や実力を備えてはいなかつた。だから革命の後をうけて議会が政治の中核となるごときは、ドイツの民衆に奇異の感を与えずにおかなかつたのである。

一九一八年十一月のドイツ共和革命に国民が熱情を持ちえない主なる理由は、共和革命が初めから革命団体の盛り上

がる熱情によって成立したものではなくして、ほとんど受動的に政治機構が崩壊した後にでき上がったことである。世界大戦四カ年の間に、帝政ドイツは根底から覆えされ、皇室も、議会も、政府も、国内に権威を維持した組織がすべて民心を失った。そして最後に大本営のみが残って、ルーデンドルフ将軍が作戦と政治とを一手に収めた。しかし戦勝の見込みが絶えて、連合国側に休戦を求めるところまで押し詰まつてくると、すべての機構が一時に倒潰した。それは革命運動の力によって押し倒されたのでなくて、全機構が自滅したのである。

その後に残つたものはドイツ各地に形成された労働者兵卒会議であつたが、心あるものはかくしてボリシェヴィキの天下になることを恐れた。だが、街頭に民衆を煽動したものは、じつは国民的背景のない少数の勤労階級であつて、一はカウツキーとハーゼ等に率いられる独立社会党であり、一はリープクネヒトやローテ・ルクセムブルグ等の過激派、すなわちスバルタキストの一群であつた。

だから当初から革命運動に優れた党首なく、組織の整然たるもののがなかつた。ことに前述の両派はその政綱と思想の傾向を異にして、前者が急進的な共和党であつたのに対し、後者はソ連と同様に無産階級の独裁と共産主義を目標としたものであつた。その間にあって社会党多数派は慎重な日和見的態度をとり、軍隊、官僚等と連絡して、見込みのない冒険を避けることに努めた。これらの事情を考えても、革命そのものが初めから失敗に帰する運命は確実であつたのである。

帝政政府の後をうけて、政府に立つたものはもっぱら多数派社会党を中心とする一群であつたが、組閣早々にして最も不快な二つの問題に当面した。一つは革命運動に熱狂する暴徒を鎮圧することであり、他は敗戦の後に処して、版図と賠償金とを剥ぎ取られる和平条約を受諾する仕事であつた。これもまた普仏戦争終結後のフランス政府と酷似した境涯である。ティエールがコンミューの乱を平定するためにパリを攻撃し、ついでランクフルト講和条約に調印して、アルザス・ロレーヌと賠償金とを約束したごとく、エーベルトの最初の事業はスバルタキスト（過激派）を駆逐し、ついでヴエルサイユ条約を受諾することであつた。

しかし和平条件はヴエルサイユ条約のほうがはるかに苛酷であつて、ドイツ共和国はアルザス・ロレーヌのほかにシ

ユレスウイッヒやポーゼン、シレジア等の領土、海外植民地の全部を失い、その他に船舶、鉄道材料、武器、石炭を引き渡し、巨額の賠償金を支払う約束を求められた。

かくして革命政府を組織した政治家は、いわゆる左党中央に属する人々であつて、イギリスの自由党に匹敵する程度の政見を抱いていた。その埠外に立つ保守党的政治家はスバルタキストの討伐を勧告する以外に、政府との協力を好まず、きわめて限られた爱国心を示したにすぎなかつた。しかも平和条約の調印が終わると同時に、右党は敗残国が当面する悲惨な境遇について峻烈に政府を攻撃はじめた。彼らはまた独裁的政権の樹立を隠密に策謀した点においても、フランスの右党がマクマホンを擁してこれに独裁政治を行なわしめんとしたことに酷似している。すなわち一九二五年にヒンデンブルグを推して大統領の職に据えたのであるが、フランスとドイツの異なるところは、前者においては右党的運動がまんまと敗北に帰したにかかわらず、後者においては首尾よく成功した点にあるといふのである。

中産階級の自由主義者はいざれの国においても氣の弱いことをもつて特質とする。よつて難局を引き受けて、孜々として國務を遂行する結果はいたずらに不人気をかち得るにとどまる。戦後のドイツにおいてもフランスにおけると同じく共和政府は、穏健な中流階級の指導の下に出発し、その態度はつねに受動的であり、また弁護的であつた。ワイメルの憲法は、その第四十八条をもつて、大統領にほとんど無制限の独裁的権限を認めたが、ヒンデンブルグはその老齢の故をもつて無為にして終わったけれども、ひとたびヒトラーが政権を握るに及んで、独裁権行使するに憲法上なんらの困難をも発見しなかつた。そしてドイツ共和国は十四年間の生命をもつて事実上終焉を告げたのである。

もっとも社会民主党の闘将を革命政府の中心に据えたのは、かくすることによつて連合国側の講和条件を緩和しようとの謀略の意味もあつたことは疑いない。しかるにあまりにも苛酷な條約を見て二重に欺瞞せられたとの憤懣の情から、ドイツ人は「馬具師」のエーベルト、「組合長」のバウワー、「裁縫師」のシャイデマン、等々の小ブルジョアからなる政府をもつて鬱憤を晴らす標的とした。かくしてワイマール派は一面に右党、一面に共産党から挾撃せられる情勢にあつたが、ようやく軍隊の支持を得てミュンヘンの共産党蜂起を鎮圧し、一九二〇年の三月にはユンカース軍の一部から成るカッブ暴動を打倒することに成功した。これを表面から見れば、ワイマール派の政権は左右両極の間にあつて、相

当に堅固な地盤の上に立っているごとく映じたけれども、事の実際においては、カップ事件で証明されたごとく、共和政に反対な強力な意見が国内に存在して、それが広く国民の支持を受けていることが判明した。国防軍の首脳部でさえも、カップ事件にはむしろ中立の地位に立つありさまであつたから、社会民主党のひきいるain・ウオーナー・ウェーヤ（人民軍）の勢力はなんらなすことなき状況であつた。にもかかわらず、ともかくも崩壊を免れたのは、ファン・ゼークト将軍のごとく、内心には中間政府を嫌いながら、国防軍と保守党の執権には時機未だ熟しないと見て、ひそかに時機を待つ人々の力であった。かくして陰に隠れながら、いつたんドイツの自由のためにいつでも闘うだけの力を築きつつあつたこれらの人たちの努力は、ゼークトがまもなく排撃隠遁の不運に陥つたにかかわらず、やがてヒトラーを推し上げる堅固な地盤を用意したものである。プロシアの貴族と地主は最も堅牢な保守勢力であり、大工業家は、一時は条約履行派を支持したけれども、ルール占領以後しだいに右党に走り、ナチスと握手するにいたつたことは、ティッセンのごときナチスのドル箱として終始した男を別としても他に例に乏しとしない。

なかんずく、共和政府に反対した有力な分子は官吏と教師とであつた。ドイツはその統一以後においても官僚国家の典型であつて、官職にあることが、人間に権威あらしめるゆえんであつた。しかるに敗戦後のインフレーションはこれらの俸給生活者、恩給権利者を最も悲惨な境遇に追い込んだ。その不平がいつせいに共和国政府に向けられたのはあやしむにあたらない。彼らはその長官が権力階級の人々であることを好み、氏名の前に von とか von とかの肩書きを付けることに憧れる。しかるに新政府の大臣はその前身が馬具師であり、裁縫師であることを滑稽至極な狂言としか受け取れなかつた。かくして反政府と右党支持とが官僚間の大勢となつてしまつた。

そのほかにドイツの大学は十九世紀の中葉以来、帝国主義の搖籃であつた。トライチケやベルンハルディの思想に影響せられて、国民主義が極端に昂揚せられた。したがつて剛健な青年とは、無批判に、冗談をまじえず、思想的自由よりも紀律を尊ぶことであり、デモクラシーとは性格の弱体を示すことを意味し、民族的階級的な立場からドイツチツムは神妙的に全世界を制圧すべきものと信じてきた。かような教育が個性より劃一、創意よりも全体への服従を重しとしたことは首肯される。それが国民主義的潮流の温床をつくり上げてきたのである。

以上のごとき深い根底をもつドイツの国民主義であるにしても、ヴェルサイユ条約の苛酷な条件がなかつたとしたら、戦後のドイツにあれほどの团结ができ上がつたかどうかは疑問である。なかにも軍備制限条項と、賠償金の支払いとは大多数のドイツ人を政府反対の陣営へ押し込めたものといつて誤りはない。だから政府に立つた次々の政治家は、条約履行を口にするとはいうものの、実際には条約の履行を試みるうちにその不可能なことを立証しようと企てていたにすぎない。ことに軍備制限については、正直にこれを実行しようと考へた政治家は一人もなかつた。政府の椅子がいかに変わつても陸軍大臣はゲスラーであり、フォン・ゼークトが参謀総長格で居据わっていた。宰相の椅子はシャイデマン、バウワー、フェーレンバッハ、ウイルト、マルクス、そしてクノーとひつきりなく取り代わつたが、それは要するに戦勝国と幻のごとき談判を続けるためにすぎなかつたのである。その陰には昔のドイツにかえることをねがつて、懸命の努力をはらう一連の人々が控えていた。そしてこれに呼応して、鉄兜団とかビスマルク団とかブリュッセル連盟とかの名で多数の青年が軍事教練を受けつた。

ワイマール派が不評を買つたいま一つの原因はインフレーション政策であつた。實際において戦後ドイツのインフレーションは、一つの政策の結果として助長されたものである。当時の財政に重要な発言権をもつた人は、大戦中に財務長官として知られたヘルフエリッヒであり、後にナチスの顧問となつたヒヤルマール・シャハトであつた。戦後の内閣は、国庫歳出入の均衡にはほとんど無関心であつたのみならず、かえつて公共事業に莫大の資金を投じ、交通機関や企業に巨額の補助金を与えた。それがために政府の発行紙幣は月々増加の一路をたどることとなつた。

議会の第一党たる社会党は、貧窮の境涯にある民衆と共にインフレーションをもつて、天の撰理のごとく受け取つた。撰理のほかにフランスの所作であるとの気持も混じていたが、インフレーションのために最も多く禍いを蒙つたものが、中産の小金持と、労働階級であつて、案外に富を失わなかつた階級は、産業資本家と地主とであつた。これをドイツの国庫の計算からみれば、外国人が他日の騰貴を見越してマルク紙幣を買い入れ、結局損失に歸した金額は、イングランド銀行のマッケンナの推算によつて見ても約七十億金マルクに達するであろうといわれる。しかし勤労階級と中産階級のインフレーションから受けた惨劇は、すべて政府の不人氣と化してワイマール派の没落を早め、大産業資本とユンカ

一階級に支持されたナチス運動を促進する一大支柱となつたことはいうまでもない⁽¹⁾。

ワイメール派の主力が多数派社会党であったことは前にこれを述べたが、一九一九年の憲法議会の選挙において占めた議席は百六十三であつて、議会の過半数を獲ることができなかつた。この党派は古くよりその政綱をもち、党の組織を維持していた。しかし政治の局に立つてはほとんど無力であることを実証した。それには情状酌量の余地あることもちろんであるが、一方には過激派の共産化を防ぎ、他方にはデルジョア諸党と協力する必要から、すべての改革手段を手控えなければならなかつた。したがつて事態の激変に茫然として、その責任の重大に遲疑している結果は、不徹底な便宜主義に墮すこととなつた。

政治の表面に立つた者は、知能もあり、策略もあり、善意の人々であつたが、威容において欠けるところがあつた。矯激な施政に反対した功績は認めるにしても、それは消極的な効果であつて、第一義的な役割とはいえない。労働組合の老練な理事長として許されるにしても、統領の材ではなかつた。

ブルジョア政党は即刻分裂を始めて、民主党と人民党とに分かれ、個人的の闘争さえも始まつた。第一流の人物はまれであつたが、その数少なき人材のうちで、マックス・ウェーベルは夭逝し、ラーテナウは暗殺せられ、残つたのはわずかにストレーゼマンであつた。ストレーゼマンの政策は、外に対しては互譲、内に対しては举国一致という標榜であったが、本来帝国主義者であつたことは疑いない。彼は、当時のドイツにおいては社会党の協力なくしてなにごともなしえないことを見り、同時にまた右党と提携する必要を感じて、所詮不可能な仕事に精根をすりへらした。右党は重大事件に当面するごとにストレーゼマンを見捨てたのみならず、暗殺をもつてこれを恫喝することさえあつた。

外交に対する隱忍互譲は、国内から侮辱と憎悪とをもつて迎えられ、外国、ことにフランス側からは不信の眼をもつて見られた。所詮それは敗戦の政治であり、苦しんで酬られない仕事であつたが、ブルジョアジーは彼とともに完全な破綻に陥つた。平凡な言葉でいえば、ワイメール共和国はあまりに重き荷物の下敷きとなつて倒れたのである。賠償問題、ルール占領事件、マルク貨の下落、中産階級の倒産等々、すべてこれらは旧帝政時代の政治家の責任であり、休戦を求めたものはルーデンドルフ将軍であつたが、しかしその善後策を講ずるにあたつては、これらの人々は手をこま

ぬいて傍観していた。そして戦時中には政権に関与しなかつた市井の有志者が立つてこの重責を背負い込み、敗戦に伴う屈辱的条件をその仲間に負担させる役割を受けたのであるから、八方からの悪罵と不満がそれらの人々に集中したものである。いいかえれば罪なき人たちが犯人の過誤をつぐなう役まわりを勤めたというかたちになつた。

最後にドイツの革命が帝政ドイツ時代の指導精神を変化させたかどうかの問題が取り上げられる。革命によつて旧帝政時代の権力階級が姿をひそめたのは、革命の新精神が過去の汎独主義的政策を一掃したためであるか、あるいはまた旧帝国主義が成功しえなかつたために葬られたのにすぎないかの点である。西欧史家の多数の見解は、革命後のドイツが依然として現実的な気風と実力政策とを遵守し、他日機会を得れば再び昔日の世界政策を取り戻す気魄を包蔵しているということに一致している。しかしてそれの実証は、ナチス運動の拡大とともにますます端的に眼前に提供されてきたことく見える。

二 ナチスの革命

敗戦後のドイツは国土を削られ、軍備は制限せられ、巨額の賠償金を背負わされて、国民は絶望の淵に沈淪した。そのうえに新共和政府はその体制においてドイツ民族の伝統にそわづ、その施政が非常時ドイツの実情に即しないために、年とともに政府の声望は地をはらい、それが国内の不安に拍車をかけた。一九二九年の総選挙にナチスが一躍して議会の第二党となつたことは、やがて訪れんとする変革の前ぶれとも見ることができた。

国民大衆は忍耐強きストレーヴマンの政策——それはできるかぎり平和条約履行の誠意を示して、履行の不可能を悟らしめようとする——にだんだんしびれをきらしていた。ことに年若き青年は鉄火の洗礼を受けず、わずかに幼時のインフレーション時代の悲惨な生活を想起こし、物の本で戦前の光榮あるドイツ帝国の偉容を教えられ、ヴェルサイユ平和の屈辱を説かれ、若き血をたぎらしている。「何故にドイツはいつまでも艱苦に悩まなければならないのか、賠償金を払わなければならぬのか、軍備制限に服従しなければならないのか」。すべてこれらの疑問に対してもうえられる解

答は、青春の血をたぎらせる材料のみである。ヴエルサイユ条約を破棄せよとのナチスの宣伝は燎原の火の如く燃え広がるのになんの不思議もない。

おりしもニューヨークに起こつた経済恐慌の余波は、一九三〇年にいたつて中央ヨーロッパの土台を揺さぶるにいたつた。英米系の資本はフランス、オランダの資本の後を追うてドイツから引き揚げられた。工業都市にも農村にも失業者が続出して、一九二九年以降年に百万人ずつ増加した失業者群は一九三三年に入つてついに六百万を越えた。かように悲惨な生活は——彼らのおもえらく——すべてヴエルサイユ条約と、無能な政府対策との所産であつて、戦勝国によつて支配せられる歐洲の現状を打破しないかぎり、ドイツは窒息するほかに途がない。それは現代文明の欠陥であるかもしれない。あるいは資本主義の害毒であるようにも見える。もしくは社会主義、共産主義の招いた災厄とも考えられる。資本家は賃金を切り下げる、銀行家は利子を引き上げ、ユダヤ人は他人の富をしぼり取る。こうした社会法則の前に、小羊のごとく頭を垂れて、嘗々として生きているに忍びない。この陰鬱な社会を建て直すには旧秩序を一掃する革命を必要とし、光榮ある新しきドイツをつくり上げるために、外国の圧力を克服する新指導者を求めなければならぬ。

この声に応じて立ち上がつたものがアドルフ・ヒトラーである。彼の雄弁は、触るところ皆斬るの概がある。フランスを罵り、共産党を痛撃し、銀行家、企業家、ユダヤ人、議会、政客等の現存社会の中核勢力一切を呪つて、祖国を衰亡に導くものはすべて彼らであると断言する。だから現代に不満と不安を抱く者は、ひとしく彼に喝采を送るのである。

ナチスは現代の経済組織を建て直し、政治を改造し、銀行を管理すると約束した。国際主義を排し、条約を寸断して、自主独往のドイツを造ることを希望するものはナチスに帰依すべしと説いた。かくしてヒトラーは救世主の地位にかつぎ上げられ、ドイツ民族の唯一の指導者として尊崇された。失業と倒産に悩む中小の市民階級が、旧来の政党を見捨てて、昔日の国民的栄光と経済的繁栄とを約束する党派に讃美を呈することは当然の成り行きであり、ひとたび資本主義に対して信用を失つた民衆が、彼らにはるかなる樂園を約束する社会党の宣伝に耳をかざすして、新しき救世主にすがらんと念ずるのは人情であった。

この趨勢に乗じてナチスの運動が大衆の魂をつかんだのであるから、その成功は時間と場所と環境との競合によるものであつて、これなくしてはアドルフ・ヒトラーが新規にナチス運動をやりなおすとしても同一の成功は困難であるだろう。一言にしていえばその標榜する「ドイツ再生」なる言葉の魅力と、これに魅力を与える街頭運動である。ナチスは好んで大衆に呼びかける。大衆はその知識の程度に即応した単純な標語を求める。理論と弁説によつて動くのではなくして、感情にひびく愛憎、なかんずく憎惡の念に動かされることは、いずれの時代にも変わらない鉄則である。

そこで、ナチス統領は、連年の不運にさいなまれた民衆に向かつて、国民的ファナチズムから発足した新しい信仰、右翼的熱情、ことに禍害の責任者として共産主義者に対する神聖な憤怒の発動を求める。それと同時に第三帝国に対する熱情、すなわち公益優先という文字によつて表微せられる国民連帯の観念を強調して、ドイツ民族国家の輝かしい前途に希望を抱かせることを忘れないものであった。

一九二一年にナチスの党首に選ばれたのは、アドルフ・ヒトラーであつた。彼は党首の権威を確立して、その命令を絶対的のものとし、ゲーリングを突撃隊長とし、フェーデルを智囊として綱領と政策の樹立を画策させた。一九三〇年以後、國家社会党は順風に帆を揚げるごとくに拡大して、選挙ごとに議席の数を増し、一九三二年七月の選挙においては、議会の第一党として二百三十二の議席を占めた。

当時のドイツの議会政治は、大統領の絶大な権限に比して、首相の権力はすこぶる制限せられ、加うるに政党各派はみずから責任の地位に立つ覚悟なくして、いかなる政府にも反対することができ、しかも内閣は議会の不信任によつて後退するのでもなく、内閣を組織する党派の軋轢によつて倒れ、そのたびごとに内閣組織は容易ならぬ困難に遭遇した。一九三三年一月にヒトラー内閣の出現するまでの十四年間に合計二十の政府が更迭し、内閣の平均寿命は八カ月にすぎなかつた。一九三二年、政府に立つたブリュニングは、国内におけるナチスの潮のごとき騰勢と民心の傾向とに鑑み、西欧諸国を歴訪し、対独政策の緩和を求めたけれども、英仏ともにワイマール派を支持する熱意を示さなかつた。史家はこれをもつてナチスの執権を必然的ならしめた理由の一として指摘する。

ステファン・ロバート教授はそのドイツ研究の著書において次のとく記している。⁽²⁾

ナチスの哲学は、その行動を回顧することによってのみ理解することができる。不斷に活動して静止せざるナチス運動においてはむしろ事実が先行して、理論はその後に従うのである。現在といえども第三帝國の背後にひそむ原理を解剖することは困難である。ヒトラー主義は政治哲学の上に起こったものにあらずして、もっぱら攻勢的な愛国的感激である。

右の観察は一応の理由があるとしても、なおかつナチスの政治哲学にはその根本とする数個の思想を発見することは困難ではない。

第一にナチスの基本的思想としては、その民族論を挙げなければならぬ。ナチスは世界の歴史をもって人種競争の記録なりと考える。ドイツ民族は神より選ばれた選民であつて、優秀な民族がその優秀な文化をもつて劣等なる民族を支配することは神の使命を完うする所以であるといい、世界の文化はアリアン民族の創造するところにして、ユダヤ民族は腐敗の本源であると結論する。

第二にナチスの運動は非知能的であることを特質とする。「われらは血液をもつて考える」と彼らがいうのは、冷静なる理知よりも、直覚と熱情に重きを置くことを意味するのである。

第三にナチスは国家社会労働党と命名するにかわらず、マルクス主義のごとく階級闘争の思想にとらわれず、アウタルキーと称して極端な経済国家主義を主張し、また民主主義、自由主義を排撃して個人ならびに国家間の不平等を認め、国権行使の権威を一人の指導者に委任せんとするのである。

以上の思想から見ればナチスの哲理は人種的国家主義であり、「一民族、一国家、一指導者」をもつて国体の根元とす。個人は社会の要素たるに止まり、個人としてはなんの価値もなく、権力ももたない。これを指導する總統は「神と國家」に対してのみ責任を負うものとみるのである。

ナチスの思想は決して世界大戦後に系統づけられたものでなくして、ヘーゲル、ニーチェ、ナウマン等の思想を粗述したものであるが、ナチスはこれを実行に移した点において、単なる思想上の運動と異なり、有力な政治運動として甚大な波紋を与えたことは二十世紀的一大驚異である。